

## 日本発のSDGs・ウェルビーイング教育についての一考察(3)

### — 日本型ウェルビーイングと道德を中心に —

高橋 史朗（麗澤大学特別教授・モラロジー道德教育財団道德科学研究所教授）

ウェルビーイングと道德の関係についての先行研究は極めて少ないが、両者を結ぶ鍵は「共感」にあるというのが筆者の仮説である。「道德感情」に注目してウェルビーイングや道德に関する新たな問題提起を行い、国連からも高く評価されている東大大学院の光吉俊二特任教授と鄭雄一教授、『AI親友論』を刊行した京都学派の西田哲学を継承する出口康夫京大教授の問題意識には共通点が見られる。

西田幾多郎の哲学は「日本的靈性」を説いた鈴木大拙の思想と照応しており、伊勢神宮の式年遷宮に象徴される日本独自の「常若（とこ和歌）」思想に通じる。こうした「日本型ウェルビーイング」の思想的基盤に立脚しつつ、内田由紀子京大教授の文化心理学、前述したAIなどの「工学的アプローチ」という新たな視点を加えて、「日本型ウェルビーイング」と道德の接点を探る、ささやかな「序論」を試みたい。

## 1 大震災後の「幸福感」の変化と日本人の幸福感

多岐にわたる心理活動が、「文化」という現象とどのように関わっているかを実証的に研究する文化心理学者の内田由紀子（京大教授）によれば、日本人の心の在り方は今、2階建ての家のようになっているという。1階は協調性で、人とのつながりや信頼関係、「仲間・家族」意識、周囲との調和を重視する。2階は独立性で、公平で公正な競争、自分で考える力、流されない意思決定、多様な価値に対応している。

内田らの共同研究によれば、地域内での信頼関係が高い町のほうが、新しい人や多様な価値を受け入れようとする寛容な態度など、より「開かれた」意識を持つ地域となっていた。そこで1階部分の協調性を、保守的で階層的なものではなく、互いの信頼関係を構築し、維持するためのシステムとして活用すれば、2階部分の独立性とは両立する可能性があるという<sup>1)</sup>。

40歳以上の中高年の引きこもりが60万人を超え、内田らの共同研究で作成された「ニート・ひきこもりリスク尺度」調査によれば、このリスクには3つの志向性、すなわち「フリーター生活志向性」「自己効能感の低さ」「将来の目標の不明確さ」があり、個人内の心の問題と社会的要因（仕事の流動性や経済的状況、「場」への復帰可能性）が相互構成的に問題を恒常化させていることが浮き彫りになった<sup>2)</sup>。

今年の元旦に起きた能登半島大地震の悲惨な被害状況が連日、テレビで報道されているが、こうした大災害が、人の心にもたらす影響は計り知れないほど大きい。被災地域における災害がもたらす感情経験に関する研究で注目されるのは、東日本大震災後の主観的幸福観は震災前に比べて低下し、特にこの傾向は主要被災県（岩手・宮城・福島）で強

いことが判明している。

阪神・淡路大震災後の心理的变化に関する研究では、人とのつながりの大切さや家族や友人の有難さなどが強まっていることが報告されている。また、東日本大震災発生後の慶應義塾大学パネルデータ設計・解析センターの調査によれば、寄付などの援助行動が全国的に上昇し、「幸福感」が下がったと答えた人は4.5%に過ぎず、むしろ幸福感の上昇を経験している人は14%であることが示されている。

さらに内閣府の第1回幸福度調査によって、以下の3つの仮説が実証された。

- (1) 震災後には気分的に落ち込みが感じられるため、一時的なポジティブ感情は減少し、ネガティブ感情が上昇した。
- (2) しかし、一方で震災の経験は自らの価値観を変え、今まで当たり前享受していた環境や他者の存在を再評価する気持ちが芽生え、その結果として幸福の判断基準が変わり、幸福感はむしろ上昇する傾向があった。
- (3) ただし上記の効果には個人差があり、被災地域に共感的な人のほうがより強くこのような傾向を示していた。

第2回調査では、「今回の地震を受けて、あなたの人生や幸福についての考え方は変化しましたか」という問いが設けられていた。これに対して「大きく変化した」「やや変化した」という回答を合計すると58%に及び、「結びつき重視」の変化が最も高かった。

これらの結果から、20代、30代の若者においては、半数以上の人たちが大震災を経て、被災地にいなくても何らかの人生観や価値観の変化を経験したこと、その内容としては社会的な関係性並びに日々の日常を大切に考えたいと思う傾向の増大が最も多かったことが明らかになった<sup>33</sup>。

エクマンらの「基本情動理論」の知見によれば、人間には喜び、恐れ、怒り、軽蔑、驚き、悲しみ、嫌悪などの基本情動があり、それらが喚起されたときには特有の表情が表出され、感情経験には文化差がある。内田らが2009年に発表した共同研究論文「感情は個人の中にあるのか、人と人の中にあるのか」は、日米における感情の構造の違いを明示し、文化の違いに応じて幸福ばかりか負の感情でも受容形態が異なることを明らかにしている。

同論文は、感情がどこからやってくるのかということを経験化したもので、日本のように相互協調的の自己観が優勢な文化においては、相手との関係性が調和した状態であることを示す「親しみ」や「尊敬」などの対人関与的感情が重要な感情経験であり、アメリカ人は個人の「誇り」や「自尊心」をより強く感じるという顕著な違いが見られる点に興味深い。

別の実験 (Chentsova-Dutton&Tsai, 2010) では、ヨーロッパ系アメリカ人の文化においては、自分自身に焦点が当たっている時に感情的になりやすいのに対して、アジア系の文化においては、他者の存在や、自分と他者との関係に焦点が当たっている時に感情的になりやすいことも判明している<sup>34</sup>。

内田によれば、幸福感の規定要因は歴史的に構築された様々な文化的・社会的要因によって大きく異なる。特に、社会的承認や地位・対人関係など、社会的な文脈で得られる幸福感には多くの文化的変動が存在する。

内田らの日米比較調査によれば、幸せの意味について5つ記述してもらったところ、アメリカではポジティブな記述が97.4%だったのに対して、日本では68%にとどまり、3割近くは「幸せになると人からねたまれる」などネガティブな記述が見られ、日本では「不

幸せには美しさがある」「不幸せは、自己向上のきっかけとなる」など、肯定的要素を見出している者が3割を占めた<sup>35</sup>。

物事には良い面と悪い面の両面が同時に存在するという「陰陽思想」の影響があり、「良いことと悪いことが同数存在するのが真の人生である」という「バランス志向的幸福感」が共有されている。個人主義的な主観的幸福感を最大化することは必ずしも至上の幸福とはならず、関係内要素の平衡化が重視される。

日本人の幸福感を特徴づける傾向としては「関係性の重要性」が挙げられ、特に人との結びつきが大切であり、親しい人から情緒的支援を得られるかどうか、日本では特に幸福と関連することが分かっている。欧米の「個人達成志向」に対して、「関係志向」であり、他者と調和した関係にある時に得られる快感情（親しみ等）が幸福感と直結している<sup>36</sup>。

「個人の幸福モデル（一人ひとりの幸福の実現を目指す社会）」だけではなく、地域全体の「集合的幸福」と「個人の幸福」とバランスを図ることが求められる。平成27年度から令和元年度まで、国立研究開発法人科学技術振興機構社会技術研究開発センターが実施した「持続可能な多世代共創社会のデザイン」研究開発領域プロジェクトとして推進した「地域の幸福の多面的測定」研究によって、以下のことが分かったという。

つながりは地域内部だけではなく、外の人も広がっているほうがより良い。「閉鎖的」と思われがちな日本の地域内のつながりは、意外にも逆に「開放性」につながっていた。地域内の信頼関係があれば、移住者についても受け入れる気持ちが強く、世代が異なる人など、多様な人の意見を聴こうとする雰囲気が醸成されていることなどが分かったのである。

地域内の信頼関係は、地域を排他的にするのではなく、むしろ地域外からやってくる人への寛容さや、地域固有の伝統や自然を守ろうという意識を高め、地域の持続可能性につながっているのである<sup>37</sup>。

「幸福の国」として注目されているブータンで最も重視されていることは、「感謝の気持ち」と「足るを知る」精神である。ブータンの国民総幸福（GNH）調査の4本柱は、自然環境の保全、公平で持続可能な社会経済開発、良い政治、伝統文化の保護と振興、であり、GNH指標としては、時間の消費の仕方、身体的健康、心理的健康と幸福、地域活動、伝統文化、良い政治、生活水準、環境、教育の9つの領域が設定されている。そのうち6つ以上が満たされている状態を「幸福」と定義している<sup>38</sup>。

ブータンでは祈りや瞑想の時間を設けることが日常的に行われており、「幸福を感じる力」を育てることに力を入れている。「協調的幸福」「集団的幸福」を「感じる力」をいかに育てるかが、ウェルビーイング教育の本質的課題と言えよう。

## 2 ウェルビーイングと道徳を結ぶ「共感」

ウェルビーイングと道徳の関係を解明するキーワードは「共感」である。共感に関する科学的な定義は極めて多様であるが、共感が感情を認知する過程や、他者が感じているものを自分事として感じる過程、他者の視点でものを見る過程など、多面的な枠組みによって構成されているという点は共通している<sup>39</sup>。

脳科学を通しての共感の科学的研究については、有田秀穂『共感する脳』（PHP新書、

2009) や、クリスチャン・キーザーズ著、立木教夫・望月文明共訳『共感脳：ミラーニューロンの発見と人間本性理解の転換』（麗澤大学出版会、2016）などがあるが、東大定量生命科学研究所の奥山輝大准教授らの研究グループは昨年7月、前頭前野という脳領域に「自分と他者の感情の情報を、同時に併せ持って表現する」神経細胞が存在することを発見し、その研究成果が英国科学誌*Nature Communication*に掲載された。

共感には「情動的共感」と「心の理論」としてよく言及される「認知的共感」とがあり、「情動的共感」は、相手の思考や感情を自分の事のように感じる、「隣の人が悲しいと、自分まで悲しくなってしまう」身体の動きに対する実感である。一方、「認知的共感」は、相手の思考や感情を相手の立場に立って「この人は悲しいのだな」と頭で理解することで生じる共感である<sup>注10</sup>。私はこれまで前者を“realize”、後者を“understand”という英語で区別してきた。

この2種類の共感は、ウェルビーイングの要因と深い関係がある。ウェルビーイングは「I(私)」が一人で作るものではなく、「私たち」や社会が共に作り合うものである。情動的共感「WE(私たち)」のウェルビーイングの要因のもととなる、目の前の人との関係を築くうえで必要不可欠なものである。一方、認知的共感「I(私)」は、目の前にいない人に対してもその立場に立って考えることができる共感である。従って、地域コミュニティや社会の一員としての「SOCIETY」のウェルビーイングの意識の源泉となる<sup>注11</sup>。

この「情動的共感」と「認知的共感」は、脳の中では異なる神経回路（前者はミラーニューロン、後者はメンタライジング）によって実現されており<sup>注12</sup>、それぞれ独立して発達する。たとえば、ソシオパス（反社会的な人格障害を持つ社会病質者）は優れた認知的共感性を持ち、うまく嘘をついたり、相手を説得したり、友人をつくることはできるが、情動的共感性が欠落しているため罪の意識や良心の呵責のような、分別のある感情的反応を示すことができず、暴力的になることもある。

反対に、ASD（自閉症スペクトラム、アスペルガー症候群）の人は認知的共感力に障害があり、他人が感じていることや考えていることを頭では理解できないが、誰かが苦しんでいる場面では、ストレスを感じる情動的共感性を持っている<sup>注13</sup>。

幼少期の親の心遣いや関わり方が、共感の認知的側面と情動的側面の両側面の発達に重要だということも、これまでの研究から明らかになっている。親の共感能力の欠如は子供の共感能力の発達不全に繋がり、この不幸なサイクルの結末は、社会のあらゆる場面に悪影響をもたらす。それ故に、児童虐待やいじめ等を予防するための方策として、共感能力を発達させるプログラムが、子供や若者向けに行われているのである。

共感性が欠如していることが、様々な精神疾患と結びついているという事実は、裏返せば、共感とウェルビーイングとが深く関係していることを示唆している。共感性の欠如は強い社会的絆を形成することを阻害すると考えられ、ある研究<sup>注14</sup>によれば、ウェルビーイングの低下と共感性の低下が相関関係にあることが明らかになっており、情動知能、非認知能力の向上がウェルビーイングの向上につながると考えられる<sup>注15</sup>。

西洋文化圏において、全く議論されていない共感の一側面に、「喜びの共感」がある。喜びの共感「MUDITA」は仏教的心理学において多くの注目を集めており、「ムディター（mudita）」はサンスクリット語で「喜びの共有」又は「共感的喜び（人の喜びを自分の事のように感じることを意味し、4つの崇高な心の状態（「四無量心」と呼ばれる仏教の徳目）の1つとし

て挙げられている<sup>注16</sup>。

慈しみ、平静さ、思いやりと同様に、共感的喜びは社会的ウェルビーイングを高めるための理想的な心的状態のうちの1つと考えられている。仏教指導者である高僧 Nyanaponika Thera (ニヤナポニカ・テラ) によれば、これらの状態は「社会的な障壁を崩し、調和的なコミュニティを構築し、長い間忘れられていた寛容さと呼び起こし、永らく置き去りにされていた喜びや希望を蘇らせ、利己主義の力に対抗する人類の兄弟愛を高める」という。

トマス・アキナスやデイビッド・ヒューム、アダム・スミスは、共感と思いやりが利他行動を引き起こすと指摘し、ダニエル・バトソンも研究結果に基づき、「共感—利他性仮説」を提唱した。この仮説によれば、利他的な動機を引き起こすものは共感である可能性が高いとされている。スタンフォード大学の思いやりと利他主義研究教育センターやカリフォルニア大学バークレー校の大善科学センター(Greater Good Science Center) もこの領域における多くの関連する研究成果を生み出しており、利他行動が他者中心的な思いやりによって引き起こされる時には、ウェルビーイングの向上につながる事が明らかになっている<sup>注17</sup>。

大阪大学大学院の大西助教らが5, 6歳の幼児を対象に行った共同研究によっても、与えることによって与えられる「互恵関係」に「共感」した幼児は利他行動をすることが判明しており、これらの国内外の実証的研究は、今後のウェルビーイングと道德教育の課題に大きな示唆を与えてくれる。

道德性の3本柱は「道德的心情」と「道德的判断力」「道德の実践意欲と態度」であるが、「道德的心情」は「情動的共感」、「道德的判断力」は「認知的共感」に近いことがわかっており、これらを「実践的意欲と態度」にいかにつなぐかが今後の道德教育の最大の課題と言える。そのためには、利他行動を引き起こす共感と思いやりをいかに育むかが鍵を握っているのである。

### 3 SDGsの起源と欠けているもの

SDGsは、2030年に向けて17の目標と169のターゲット、それに伴う232の指標を示しているが、2つの起源がある。一つは地球環境に関する「持続可能な開発」という考え方である。

1987年に国連「環境と開発に関する世界委員会」が出した報告書が基になり、1992年にはブラジルのリオデジャネイロで「地球サミット」が行われた。世界で初めての地球環境問題に関する大型の国際会議で初めて打ち出されたのが、「持続可能な開発」という考え方であった。

もう一つは、2001年に途上国の開発のために作られたミレニアム開発目標の期限が2015年で、一定の成果は上げたものの、8つの目標の内、3つが保健関連であるなど中身に偏りがあり、もっと幅広い目標が必要ではないかという反省があった。また、目標の達成度にばらつきがあり、途上国からは自分たちの問題なのに、策定に関与できなかったなどの不満も噴出した。そこで、2015年を機に、国連加盟国すべてを対象に、策定も自らで行うことになり、途上国から先進国まで193カ国が参加して合意形成が図られた。

作業部会でとりわけ紛糾したのは、平和や安全、気候変動の問題に加え、人口問題や、女性の“reproductive health/rights”（産む産まないを決める自己決定権）の概念をめぐることであった。多くのイスラム諸国やキリスト教国は、人工妊娠中絶などの面で女性の自己決定権を認めようとなしなかった。

SDGsの最大の課題は、17分野、約200項目の分野間、項目間の優先順位が不明という点にある。これがウェルビーイングが時代の要請として登場してきた背景と言える。また、政治的な「平和」の重要性とか、社会的文化的な「地域の伝統文化や工芸品を大事にしよう」などの要素は欠落していた。

SDGsには、平和に関する項目(目標16)が1つだけ入っているが、軍事産業に配慮して、SDGsには「平和」を入れない予定であったが、議論の最終段階で東ティモールの強い要請で盛り込まれたという経緯があった。

SDGsの中心概念である「開発 (development)」は経済優先の片寄った概念で、政治的、社会的なアジェンダが欠落していた。

また、SDGsは「誰も取り残さない」というスローガンを掲げているが、「命を守る、地球を守る」が基本テーマで、「ネガティブをゼロに」してダメージを減らすことに主眼が置かれている。しかし、「マイナスを減らす」とこと、「プラスを増やす」ことは全く異なる営みである。

SDGsは、ニーズを大切にする価値観で、「将来世代のニーズを損なわず、現在のニーズを満たす」ことを目指している。その特徴の第一は「次世代」ではなく「将来世代」なので、時間軸が長いこと、第二に、SDGsの根本思想は「負の遺産を遺さない」ことにあり、「海を汚さない」とは書いているが、「海と共にある豊かな暮らし」のような「正の遺産」を繋ぐような項目はない。

SDGsは2015年から2030年の目標なので、2030年には終わる。「負の遺産を遺さない」というSDGsに代わって、ウェルビーイングという「正の遺産」も繋いでいこうというコンセンサスが国際社会で形成されている。

国連生誕100周年の2045年までの新たな国際指標はSWGs (Sustainable Well-being Goals) へと進化する。日本がリーダーシップを発揮し、Global Wellbeing Initiativeを立ち上げ、世界各国の研究者、国際機関、企業とネットワークを結び、世界160カ国のウェルビーイングの測定を2020年から開始し、翌年3月には、「日本版Well-being Initiative」(ウェルビーイングという概念と新指標を2030年以降のポストSDGsにおけるグローバル・アジェンダに位置付けることを目指す企業コンソーシアム) を立ち上げ、住友生命がサポートしている。

来年9月に開催予定の国連の“Summit of the future”の準備会合が昨年9月に日本で開催され、日本がリーダーシップを発揮することが期待されている。昨年2月にも米コロンビア大学のサックス教授と共同研究を進めている英オックスフォード大学のヤン教授らを日本に招いて国際会議が開催された。

特にウクライナやガザなど戦争が終わる地域では復興に向けた動きが始まるが、極めて重要な国際指標が子供たちの復興である。SDGsは分野間、項目間の優先順位が不明だが、ウェルビーイングの視点を導入すると、優先順位がつけやすくなる。

日本に求められているのは、バランスと調和を2本柱とした日本発のSWGsの新たな国

際指標づくりを推進し、日本発の新たな幸福度の国際指標を世界に発信し、世界をリードすることである。ウクライナとガザの戦争が泥沼化している今こそ、「人類全体が幸せにならなければ、個人の幸せはない」という宮沢賢治のメッセージを、世界に向かって発信しなければならない。

2025年に大阪・関西万博が開催されるが、SDGsの達成の総括とポストSDGsとしてのSWGs、SDGsからWell-beingへの展望と課題がテーマとなる。

民主党政権下の2009年から2010年にサルコジ仏大統領がGDP（国民総生産）を超えるものとして、ウェルビーイング論を展開し、日本の民主党政権も仕掛けたが、「最小不幸社会」という不適切なキャッチフレーズを掲げたために失敗に終わった。

民主党に代わって、自民党の下村博文議員と上野通子議員が中心となって「日本Well-being計画推進特命委員会」を立ち上げ、2019年に政府の「骨太の方針」や「成長戦略」にウェルビーイングが位置付けられ、施策のKPI（重要業績評価指標）にすることが明示されるに至った<sup>注18</sup>。

鈴木寛東大・慶應義塾大学大学院教授の「日本のウェルビーイング実感に関する現況」（2023年7-9月期）報告によれば、ウェルビーイング実感が高い人達の割合（10段階で自分の生活を自己評価した際、「今の生活が7点以上」かつ「5年後の生活が8点以上」と回答した割合）は、2008年から2009年にかけて失業率の低下によって下落し、その後雇用が守られたことによって回復したが、コロナの長期化によって一時再び下落したが、2023年7-9月期の速報値は回復傾向にあり、1人当たり実質GDPより高い水準を保っている。

ウェルビーイング実感調査は世界150ヶ国以上で毎年行われており、日本では2006年より国連のWorld Happiness Reportを出しているGallup社が15歳以上を調査対象として、電話調査によって実施している。詳細については、Global Well-being Initiative参照。

6月16日に公表された日本政府の令和5年の骨太方針（経済財政運営と改革の基本方針2023「加速する新しい資本主義—未来への投資の拡大と構造的賃上げの実現—」）の36頁に、「成長と分配の好循環」の実現状況を各種指標から検証する、と明記され、成長の指標として、Well-being（生活満足度）と1人当たり実質GDPの2本柱、分配の指標として、1人当たり賃金・俸給と中間所得層の構成割合などが明記された。

今春には武蔵野大学にウェルビーイング学部が新設され、東洋大学も学科としてウェルビーイング研究に力を入れるという。私も昨年11月16日に麗澤大学で、「SDGsとWell-being」をテーマに講義したが、国連では今や“post SDGs”として、新たにSWGs（Sustainable Well-being Goals）が掲げられ、GDPを超える指標として、Well-beingに注目が集まっている。

国連の“Summit of the future”をリードするワーキンググループの人選が現在行われているが、我が国で閣議決定された「日本発のウェルビーイング」として、「バランスとハーモニー（調和）」を重視する幸福度指標を、世界に向かって発信する日本のリーダーシップが強く求められている。

ちなみに、「骨太の方針」に成長の指標として明記されたWell-beingに関連する指標は、以下の3つである。

- (1) 内閣府のWell-beingダッシュボード
- (2) 各省庁が基本計画等で設定している、Well-being関連のKPI（重要業績評価指標）

(3) 経済財政諮問会議で「成長と分配の好循環」を検証<sup>注19</sup>

## 4 ウェルビーイングの三分類・形態

ウェルビーイングには、①医学的②快樂主義的③持続的ウェルビーイングの3つの側面があるが、近年はウェルビーイングを持続的かつ包括的に捉えようとする考えが主流となっている。哲学者もウェルビーイングに言及しており、アリストテレスは「善」を、①有用さ②一時的な快樂③幸福の3種に分類し、最高の善が幸福であると考えた。

ウェルビーイング理論を分類すると、個人に関する「I」、「思いやりや感謝、組織や社会などで良好な人間関係が築けているか」など、他者や社会との関わりの「WE・SOCIETY」、「世界平和」などの特定の関係性を超えた全体的視野で見たときの世界との関わりの「UNIVERSE」の3つに大別される<sup>注20</sup>。

私たちのウェルビーイングと密接な関係にあるのがテクノロジーである。人口知能(AI)やバーチャルリアリティ(VR)など、近年のテクノロジーの進化には目を見張るものがある。ソーシャルゲームへの依存による過度な課金、プライベートなコミュニケーショングループにおけるいじめといった、社会的な問題も発生している。こうした状況を考えて、テクノロジーは必ずしも人を幸せにしているとは言い切れない。

インペリアルカレッジ・ロンドンのラファエル・カルヴォ教授とUXデザイナーのドリアン・ピーターズ氏は、心理的ウェルビーイングと人間の潜在力を高めるテクノロジーを「ポジティブ・コンピューティング」(Positive Computing)<sup>注21</sup>と名付けた。カルヴォ氏は著書*Positive Computing* (邦訳『ウェルビーイングの設計論—人がよりよく生きるための情報技術』ビー・エヌ・エヌ新社、2017)の中で、次のように指摘し、生産性や効率性のためだけでなく、個人や社会の問題にも資する、これからのテクノロジーの在り方に言及している。

<コンピューターが誕生した当初は生産性と効率性がひたすら追い求められたが、そのような価値観は徐々に過去のものとなりつつある。私たちは新たな時代へ突入しようとしており、テクノロジーが個人のウェルビーイングと共に、社会全体の利益にも貢献することが重要だ><sup>注22</sup>

情報通信技術がここまで生活に浸透した今、テクノロジーからウェルビーイングを設計する指針が求められている。既に一部の企業は、自社のサービスやプロダクトを通じて、単なる便利さを提供するのではなく、「豊かな世界」を実現するために動き出している。スマートフォンやバーチャルリアリティ、人工知能といったテクノロジーの可能性を活用して、私たちの暮らす世界にウェルビーイングを実装する試みが始まっているのである。

そもそもWell-beingとは、心理的・身体的・社会的に「良い状態」であり、Well-beingを決定する心理的要因は次の3つのカテゴリーに分類できる<sup>注23</sup>。

(1) I(個人的なこと)



- 目標がある
  - やりたいことができる
  - 自分だからできると思う
  - 自分を好きでいられる
  - 好きな本を読む、音楽を聴く
  - 読書やゲームに没頭する、など
- (2) WE・SOCIETY (他人との関係性や社会的なこと)
- 感性を共有できる
  - 人に認めてもらえる
  - 頼れる友人がいる
  - 他者と認め合える
  - 家族を大切に作る
  - 他人と自分を比べない
  - あえて空気を読まない
  - 適度に一緒にいない、など
- (3) UNIVERSE (超越的な世界との関わり)
- 世界が平和であること
  - 多様な価値観を受け入れる
  - 社会に貢献する
  - 世界の本質を追求する
  - 美しい景色を見る
  - 自然との一体感を得る
  - アイドルやアーティストへの敬愛、など

ウェルビーイングという言葉の語源は、「well (満足の)」と「being (本質)」である。満足の意味は今日1日の単位で考えるのか、人生全体で考えるのかという時間軸で変わる。今日の失敗は嫌なことであるが、人生全体で考えると「難が有ることは有難い」と感じられることもあるからである。

戦後行われてきた国民生活選好度調査によれば、生活の満足度には変化はなく、戦争・貧困・病気の三大苦が大きく改善されても、意外なことに満足度への影響はなかったことが判明している。

公益財団法人Well-being for Planet Earth代表理事の石川善樹氏は、「理解」には「ロジック」「大局観」「直観」の3つの形態があり、それぞれの観点で、ウェルビーイングとは何かについて考察している。

「ロジック」によるアプローチでは、まずウェルビーイングを測定し、要因を分析する。測定に関しては、国連が毎年150以上の国・地域を対象に行っている幸福度調査の結果をまとめた“World Happiness Report” (世界幸福度報告) が参考になる。

ちなみに、2019年の報告書では日本は58位であった。この調査における幸福度と最も関連が高いのは「1人当たりのGDP」で、収入や年収が上がるにつれて幸福度は上がるということになる。

さらに関連度が高いものは2番目に「困ったときに頼れる人がいるか」、3番目に「平均寿命」、4番目に「自分の人生を自由に選べる感覚」と続く。しかし、こうした観点からウェルビーイングを理解するのは難しい。

例えば、20世紀で最も研究された病である心臓病には、かかりにくい人の特徴として、「高収入」「友達が多い」「非喫煙者」など、マクロ、メゾ(マクロとミクロの間)、ミクロを合わせて100個以上の要因が明らかになっている。

それにもかかわらず、未だに発病する理由の半分も解明できていない。仮にすべての要因を理解しても、それらの相互作用が複雑すぎて制御不能になり、データを使って何かをしようとしてもモグラ叩きになるだけで、叩けば叩くほど新しい問題が出てきてしまうからである。そう考えると、ウェルビーイングをロジックとして理解することは難しい。

では「大局観」でウェルビーイングを理解するアプローチはどうか。この手法を、狩野派が描いた『洛中洛外図』という絵画を例に考えてみると、京都の街を描いた本作は、橋

や衣服、履物といった各「要素」は非常に細かく描かれている一方、絵画全体で見ると大部分が雲で覆われている。

この不思議な構図の裏にあるのは、ある種の「ごまかし」で、日本の画家は、京都とは何かを要素ごとに分解して再構築することは不可能だと判断した。そこで、ビッグピクチャーとしての京都と、いくつかの詳細な要素を描き、その間を「間(ま)」として描いたのである。

石川氏によれば、これは物理学者がよく使う手法で、両者の間を行き来しながら現象を理解していくと、物の見方がやがてロジックから解放されていくという。

そこで、石川氏は人生をビッグピクチャーとして「春夏秋冬」として捉え、100年の人生を25年ごとのビッグピクチャーに区切り、人生最初の25年は、肉体的に成長する「春」。次の25年は、精神的成長が進み、働きながら家族を扶養する「夏」。

さらに、肉体的にも精神的にも成熟した「秋」になると、人生100年時代の本番がやってくる。例えば、ノーベル賞受賞者たちが受賞のきっかけとなる研究を始めた年齢はおよそ40歳から50歳だと言われている。

またアメリカで雇用を生んでいるベンチャー企業は、社会経験もスキルも人脈も築いた50歳前後の人間が創業していることが多い。50歳までに蓄えた力を使って、本当にやりたいことを始めるのがこの「秋」なのである。この時期に働いて築いたものが「冬」である75歳以降の自分を支える基盤となる。私は73歳になるので、「晩秋」から「冬」に向かっている時期といえる。

3つ目は「直観」による理解である。「見ればわかる」が大切なこのアプローチでは、ロールモデルを見つけることが大切である。石川氏は『さんまのご長寿グランプリ』というテレビ番組に出ていたあるお爺ちゃんを観て「これだ」と感じたという。これが「直観的理解」で、日本的ウェルビーイングの「満足の本質」が閃(ひらめ)いたのであろう<sup>注24</sup>。

## 5 「我々としての自己」と日本型ウェルビーイング —出口康夫『AI親友論』

京都大学大学院文学研究科哲学専修の出口康夫教授の『京大哲学講義 AI親友論』は、東京大学大学院の道徳感情数理工学専攻の光吉俊二特任准教授や鄭雄一教授の問題意識との共通点があり、なかなか興味深い。また、鄭教授によれば、同著『東大理系教授が考える 道徳のメカニズム』(ベスト新書)と「幸福学」の提唱者である前野隆司慶應義塾大学ウェルビーイングリサーチセンター長の著書『幸せのメカニズム』(講談社現代新書)の内容は合致するという。毎週自民党の「日本Well-being計画推進特命委員会」でお会いしている前野教授に確認したところ、「その通り」と太鼓判を押された。

出口教授は京都学派の哲学、道元思想、東アジア仏教思想などを研究し、近年は「できなさ」に基づいた人間観・社会観として、“Self-as-We”(われわれとしての自己)を提唱し、NTTや日立京大ラボをはじめとする産業界との共同研究にも力を入れている。

東大大学院の道徳感情数理工学専攻との接点は、AIと道徳の関係について論じていることである。出口教授の前掲書から関連部分を抽出すれば、第二講「道徳的AI」(48頁)「道徳的エージェント」(66～69頁)と第六講「AIに倫理を装備する」(133～164頁)である。

出口教授によれば、東アジアには「自律的自由」とは異なる「わたしの自由」概念が脈々と息づいていた。そのような東アジア的な自由概念の例として、仏教思想に見られる「自在的自由」と老荘思想における「自遊的自由」がある。

仏教思想における「自在的自由」の概念が顕著に見て取れるのは、大乘仏教の経典『大般涅槃経』で、東アジアの仏教に大きな影響を与えた。涅槃の四徳（常、楽、我、浄）のうち、「我」は自由で妨げがなく、ブッダの法身であり、8つの大いなる自由を有する。

この「自在的自由」にとっての「悪い束縛」とは、行為を行う能力の「制限・限界」に相当する。つまり、「自在的自由」とは、能力が「制約・制限」を免れていること、能力の「無制約性」を意味する。このように、行為遂行能力に限界がない状態が「自在」としての自由だとされたのである。

老荘思想における「自遊としての自由」は、中国の老荘思想、特に『莊子』に登場する「遊」や「逍遥」といった概念においてうかがえる。この場合の「悪い束縛」とは、「規則」ないしは「規則に縛られていること」だといえる。

そうすると、ここでの「自由」とは「規則から脱していること」「規則に縛られていないこと」、すなわち「柔軟性」や「自発性」を意味する。行為の遂行が規則でがんじがらめになっていることが「不自由」、そのような規則に縛られずに遂行されていることが「自由」だとされる。

人生の主体である自己は、ウェルビーイングの主体でもある。ウェルビーイングとは自己の一状態であり、自己とウェルビーイングとは切っても切れない関係にある。自己を問うことはウェルビーイングを問うことに他ならない。「自己とは何か」を問うことが、古今東西の哲学にとって重要なテーマであった。多くの哲学者は「人生の主体」が「自己」と捉えてきた。

西洋近世哲学にとっての自己は、他者や周囲の環境や世界から明確に切り離され、他から孤立した「個人」であった。それに対して、東アジアの思想家たちは、この「個人」という殻を打ち破る努力を続けてきた。

デカルトやカントに代表される西洋近代哲学の「強い自己」観と比べると、「東アジア的自己観」の特徴は、脱個人主義的で「弱い自己」を標榜した点にある。このような脱個人主義的で「弱い自己」を標榜した東アジア的自己像の一つに、老荘思想や禅を中心とする仏教思想の中で語られてきた「真の自己」がある。この「真の自己」の特徴として、「全体論性」と「身体行為性」の二つが挙げられる。

全体論的自己とは、世界ないし森羅万象と同一視された自己である。例えば、老荘思想の古典の一つ『莊子』齊物論編では、自分自身のことを忘れ、「万物」と一体化した自己について語られている。この自己はまた、全自然がおのずと奏でる調べである「天籟」に耳を澄まし、一体化する「我」でもある。

世界と一体化したこの全体論的自己は、その後、禅思想に取り入れられ、「森羅万象として現れている身体としての自己」として表現され、道元は「自己自身によってではなく万象によって修証される（悟りを開かされる）自己」と表現した。

一方の身体的行為的自己の源泉の一つは、禅の「心身一如」思想で、道元によって「身現」という仕方で概念化された。「身現」とは、世界の真の在り方(実相)を意味する「仏性」を、座禅などの修行に打ち込む身体行為によって端的に表現することを意味する。「身現」と

は、自己が世界の実相と一体化した、身体行為そのものとしての自己なのである。

このような道元の考えを受けて、京都学派を創始したに西田幾多郎は「行為的直観」と表現したのである。これは、大工による建築作業といった、社会の只中で行われる「身体を使った生産行為」そのものとしての真の自己の在り方を意味する概念である。道元も西田幾多郎も、自己を身体と同一視した禅思想をさらに徹底することで、自己をその都度の身体行為に還元する身体行為的自己観を打ち出したのである。

このような「真の自己」が享受するウェルビーイングもまた、全体論的で身体行為的な在り方を持つことになる。荘子の言う「天籟」という全自然がハーモニーを奏でている状態、その天然の合奏に耳を傾けつつ、自らもその合奏に加わる自己の在り方だということもできる。このように全自然がおのずと奏でる調べを体現する、その都度の身体行為になりきることこそが、ウェルビーイングに他ならない<sup>注25</sup>。

そこで、出口教授はこれらの先人からのメッセージを現代の概念や論理の水準を満たす仕方でも再編成しなければならないという問題意識の下に、このような東アジアの真の自己を、全体論的で身体行為的な現代的自己観、すなわち「われわれとしての自己」観として哲学的に再生する作業に取り組み、『京大哲学講義 AI親友論』<sup>注26</sup>を出版したのである。

同書の「はじめ」には、次のように書かれている。

＜ここで言う「われわれ」とは、ある一つの身体行為を、意識・意図するとしないうに関わらず、結果として支えている数多くのエージェントからなるシステムを意味します。この「われわれ」には、人間も人間以外の動物も無生物も、そしてAIやロボットなどの人工物も含まれます。このような「われわれ」のメンバー同士としての人間とAIの間にはどのような関係が成り立つべきかを本書は問うています。…本書は、人格を備えたAIや「親友」としてのAIについても語ります。それら、いや彼ら彼女らは、「人間とは何か」を時間軸で問う哲学的思考実験の登場人物なのです。

このように以下の講義は、現状を超え、はるか斜め上を見ずえる視線で語られています。…僕はそこにAIと人間が親友として交わる新たな「われわれ」を見ています。本書の最後のページを閉じられた後、あなたには、何が見えることになるのでしょうか。＞

## 6 日本の「常若（とこわか）」思想と「常若産業甲子園」

平成26年から宗像国際環境会議を毎年主催している宗像大社の葦津敬之宮司が『生命文明の時代』（NextPublishing Authors Press, 2019）に寄稿された論文「常若—持続社会に向けた日本人の自然観」には、持続可能な日本独特の循環を意味する「常若」に関して、次のように書かれている。

＜伊勢神宮には、二十年毎に建物と神宝類を造り替える「式年遷宮」という制度がある。これは約千三百年前につくられたものであり、当時は奈良の法隆寺などが既に出来ていたのだが、何故か伊勢神宮は法隆寺のような恒久的な建物とせず、二十年毎に造り替える方式をとっている。この新しくなる社殿はいつも瑞々しく、若々しいということから「常若」とも称されるが、正にその姿は春先の新芽のようでもあり、それは自然の循環に永遠

性を見出して考えられたようにも見える。・・・

自然はただあるだけではなく、人もその命を戴きながら子や孫たちへと生命を繋いでいる。伊勢神宮の式年遷宮も同様に森から沢山の木々の命を戴きながら、千年以上の時を紡いでいる。持続可能という時間の定義はないが、千年という時間はそれに十分あたいするのではないだろうか。…持続可能とは自然の循環、若々しい生命の循環「常若」でもあるが、それを維持していくには、自然の摂理を十分理解した上での高い精神性も必要となる。><sup>注27</sup>

また、元ユネスコ事務局長官房特別参与・麗澤大学教授の服部英二氏は、人類史の最大の出来事は、17世紀の科学革命に起因する人間の「自然との離婚」とであると指摘し、次のように述べている。

<SDGsとは何か？その答えは皆さんが今立っている伊勢の地と森にあります。すなわちここにWorld of Sustainableの一つのモデルが見られるのです。それを私は「とこわか（常若—高橋注）の思想」と呼びたいのです。以下の文章は、私が2016年、この地で行われたG7サミットに寄せた声明です。

「量子力学をはじめとする最先端の科学は、宇宙には科学が放棄した先人たちの宇宙観に近いある種の全一的秩序——ホールネス——が存在することを発見するに至りました。万有の相関と相互依存を説くその新しい全一論によれば、全は個に、個は全に遍照するのであります…」(「東京からのメッセージ」UNESCO 1995)

この新しい存在論では、人間は大自然の一員として母なる地球と共に永遠の死と再生を繰り返す存在として再把握されるのです。それは「ともいき（共生—高橋注）」の思想であり、生きとし生けるものの相互依存の実相の把握であります。

伊勢はサステナビリティの象徴であり、神社そのものが20年に一度白木で蘇る式年遷宮は、石にも金にもまして、永遠のいのちを語っています。

ここを訪れたフランスの文化大臣・思想家のアンドレ・マルローは、「ピラミッドよりも、カテドラルよりも、伊勢は雄弁に永遠を物語っている」と述懐しましたが、彼はまさに「とこわかの思想」を読み取っていたのです。

アーノルド・トインビーは伊勢を訪れた時の感慨を次のように書き留めています。「この聖なる地で、私はすべての宗教に通底する一なるものを感じる。」>

これは『地球システム・倫理学会』会報18号(2023、10.25)に掲載された服部英二氏の「特別寄稿」から引用したものである。なお、ホールネス(全一的秩序)について詳細に解説したJ.Cスマッツ著『ホーリズムと進化』(石川・片岡・高橋共訳、玉川大学出版部、2005)を参照されたい。同書には特殊な専門用語が多く、訳出に数年を要し大変苦労した。同書の意義について私が解説した「訳者あとがき」も参照されたい。

また、「常若産業甲子園」は、宗像国際環境会議の一環として、経済産業大臣補佐官を務めた岸本吉生氏が提唱し、令和2年に始まった。同会議は「海の鎮守の森」構想を掲げ、

海の再生事業に取り組みながら、日本の環境の未来について話し合ってきた。

大人と子供の絆が滞れば、環境も産業も途切れてしまうという危機感から始まった「常若産業甲子園」プロジェクトは、ドキュメンタリー映画作成、クラウドファンディング等を通じて、提言・情報発信を続けている。

同プロジェクトによれば、「常若」には日本の古き良き文化を重んじる意味があり、また、その時々々の気候や情勢など、時代に合った新しい価値観で、伝統すらも新しく変えていくことも含まれ、新しい状況に応じて柔軟に変化することも意味しているという。これは「伝統の創造的再発見」という視点にもつながる。

岸本吉生氏によれば、同甲子園に出場する条件は、「常若産業宣言」を見て、自分はそういう産業に就きたいと思うこと、将来やりたい仕事について、自分で動画を撮影して編集できることであるという。

全国各地の農山漁村などで環境保護などの活動を展開している小中高生たちが、「常若産業甲子園」のコンセプトにつながる、「あとからくる者のために」という坂村真民の詩に学びながら、情報デザイン会社の協力の下にドキュメンタリー映画の制作に取り組んでいる。

日本中の子供たちが全国各地で活動している「師匠」たちと出会い、学ぶことによって、地域の大人と子供の絆、結びつきを深め、高める「21世紀型武者修行」の仕組みづくりが必要である。

普通高校で行われている高校3年生のSDGsに関する総合的な探求の時間では、客観的、学術的に、自分の好き嫌いとか良い悪いとかを切り離して「他人事」として捉えた発表が目立つが、SDGsを「自分の事」として探求すれば、自分の将来に関わる捉え方になる。

SDGsに掲載されている17の開発目標を、「客観的、論理的、俯瞰的なことを作るSDGs」ではなく、「自分がやりたいSDGs」として捉え直せば、一人ひとりの子供が多様な課題を発見できる<sup>注28</sup>。

## 7 日本型ウェルビーイングの特質を和と能から考える

島根の神楽を取り入れた「古事記」など、能・音楽・朗読を融合させた舞台を数多く創作・出演し、シュメール語による神話『イナンナの冥界下り』のヨーロッパ公演を行った能楽師の安田登氏によれば、俳人の黛まどかさんがフランスのパリで大学生に俳句を教えた際に、最も苦労したのは学生の俳句の中から「私 (je)」を取り除くことであったという。

彼らの俳句にはどうしても「私」が入ってしまい、例えば、「雨」を詠めば、「その雨は私の心の象徴で」のような話になり、なかなか「私」という意識から離れられないというのである。

では、日本での「私」はどうか。『源氏物語』のような平安文学は、文脈と敬語によって主語を推察することが期待されているために、主語の多くが省略される。

さらに中世の能になると、文脈からも敬語からも主語が特定しにくく作られるようになる。わざと主語がはぐらかされ、「私」も「あなた」もなくなり、主客が融合してしまうのである。

能の中の主客の融合は、日本語に特徴的な「共話」という会話形態によって引き起こさ

れる。例えば朝、ちょっと大きな地震があったとする。昼に会った2人のうち1人が「今日の地震ね…」という、もう1人がすかさず「大きかったよね」と言って、2人で1つの文（「今日の地震、大きかったよね」）が作られる。

このような会話形式を「共話」という。このような「共話」は、相手の発言を途中で遮ってしまうので、欧米圏ではあまりよくないこととされている。しかし、日本ではこれができない人の方が、コミュニケーションの問題があると思われたりする。

能という芸能には、この世の人間である「ワキ」という役と、この世ならざる存在である「シテ」という役が登場する。この両者は住んでいる世界だけでなく、住んでいる時間も異なる。

ワキは過去から現在、そして未来へと進む「順行する時間」に住んでいるのに対し、シテは今の時間を過去へと引き戻そうとする「逆行する時間」の中に住んでいる。

住む世界も、住んでいる時間も異なる2人の会話は当然噛み合わないが、あることをきっかけに2人の間に共有する《何か》が出現し、その《何か》をきっかけに2人の会話は「共話」となっていく。

共話によって融合しはじめた2人の会話は、それが進むとお互いに発する語数が減ることによって、それはさらに促進され、ついにはどれが誰の発言なのか全く分からなくなる。

自他の境界が溶け合い、そして最後には彼らすらも消えてしまったような感覚を観客に与える。2人は、彼らを取り巻く環境、すなわち景色と一体化するのである。

そこまでいくと、「あなた」に対する「私」が消えるだけでなく、「私」そのものも消えてしまう。彼我の時間の差も越えて、現在と過去が統合される「今は昔」が出現するのである。相違よりも共有を見出す「共話」という方法によって、住む世界すらも全く異なる両者は融合していき、「私」は消滅していくのである。

この「私」の希薄性は、近代以降批判の対象となり、「個人」が確立せず付和雷同的な国民性として非難的になった。聖徳太子の17条憲法には「和を以て貴しと為す」と書かれているが、「和を貴しと為す」と書かれた『論語』の前には「礼の用は」と書かれており、「和」を成立させるためには「礼」の作用が必要だというのが『論語』の考え方である。

「和」の正漢字は「龢」で、様々な音の楽器を一緒に演奏するというのが原義である。そこから、様々な人が様々な意見を出したり行動したりすると混乱するが、それを統制するために「礼」、すなわち秩序が必要だというのが『論語』の考え方である。

それを聖徳太子は「和」そのものが大事であるという思想に変化させ、「礼（秩序）」を導入しなくても、「私」を捨て、多様性の相違点よりも多様性を通底する共通点を見出す「共話」、すなわち「和の議論」が大事と考えたのである。

まず「私」を捨て、「和の議論」を続けながら、個人では到達できなかった全く新たな知見を獲得し、「三人寄れば文殊の智慧」が出現するのをじっくり俟つのが「和の議論」、すなわち「対話」に他ならない。

孔子は、「君子は和して同ぜず、小人は同じて和せず」と喝破し、「和」に対する概念として「同」を提示した。「同」とは皆で同じことをすることで、これが「付和雷同」に他ならない。

今日の日本の「和」の多くは、孔子の言う小人の「同」即ち「付和雷同」になってしまっ

ており、「同じて和せず」になってしまっていると言わざるを得ない。

「和」は文学においても重視され、日本の伝統文化の核である「和歌」は、文字通り「和する歌」であった。誰かに歌いかけられたら、それに「和する(応える)」ことが求められた。歌の中に「和」の話法が内包されているのである。

『卒都婆小町』という能があるが、絶世の美女と言われた小野小町がシテ(主人公)の能である。しかし、この能の中の小町は醜く年をとった乞食の老女である。老残の姿を晒して人々から軽蔑され、また彼女との思いを遂げられずに憤死した深草少将の亡霊に憑依されて狂気になったりする。

彼女がそのようになってしまった理由は、深草少将から贈られた歌に返歌をしなかった罰であると能では語られる。歌を詠みかけられたら、和する(応える)ことが、和歌の基本ルールなのである。

しかし、平安末期から鎌倉初期に活躍した歌人である藤原定家は、そのルールから美しく逸脱し、「和する歌」の伝統を破壊し、和歌から「和」の性質が失われていった。

和歌が「和」の性質を失っていったがために、「和」の性質を引き継いだのが「連歌」であり、「俳諧の連歌(連句)」である。そして、それをを行う場としての「座」が生まれた。座というシステムは、平安時代までの「和歌」が成立しなくなったために、「和」が含まれる歌を生み出そうとした試みであったといえる。

私が提唱して全国に広がった「親守詩」も、子供が作った上の句に「和する」下の句を親が作るという、「和歌の伝統の創造的再発見」による現代的試みに他ならない。

「私」の「所有」という概念を捨て、「私」にこだわらない昔の日本人の生き方を学び直し、「和」の精神に立ち返ることによって、日本型ウェルビーイングを取り戻す必要があるのではないか。

能には、「せぬ隙(隙)」という概念がある。「何もしない間」という意味である。能の動作は「静止」を作るためのものである。能の囃子(音楽)を聴いていると「音というのは、音と音の間の無を作るもの」だということが分かる。音そのものに意味があるのではなく、音とは「無」を作るためのものなのである。

世阿弥は「無主風(主体性のない芸風)」と「有主風(主体性のある芸風)」と表現したが、能の稽古は徒弟制で、師匠と一緒に過ごしながら、師匠の芸のみならず、色々なことをそっくりそのまま真似する。その時の芸は「無主風(主体性のない芸風)」といわれ、それを身に着けるまでに最低10年はかかるという。

それがある瞬間に「有主風(主体性のある芸風)」となり、ここで初めてその人の役者としての人生が始まる。このように芸風が変わることができるのは、身体に制限があるからなのである。師匠から2時間の稽古をしてもらっても、その帰路、多くの人は10分の1も覚えていない。実はこの忘却こそが大切なのである。

人間は、その忘れた分を自分の過去の体験や蓄積した経験としてのストックで「補う」ことができる。ストックがある沸点を超えた時に、「無主風」は突然師匠とは違う「有主風」に変容し、「個性」となるのである。無主風から有主風への変化は、「制限」によってのみ実現されるのである。

能には自分はある人かもしれないし、今は昔かもしれないという「共話」的な感性、「私」を超越した「和」の感性が背景にあるのである。AIやネットに譲り渡した脳の余裕こそが、



世阿弥の言う「せぬひま」である。身体に制限があるからこそ、人が無主風から有主風に変わることができるように、「知」すらもAIにとってかわられた脳は、全く新しい精神活動を生み出すかもしれない。そこで生まれる新しい精神活動は、今の私たちでは想像できないほど豊かなものになるであろう。

もともと「わたし」にこだわらない、「和」の日本型ウェルビーイングは、そのような新しい社会を主導するはずである。新しい「私たちのウェルビーイング」を作り合うために、今こそ昔の日本人の生き方を学び直す必要がある<sup>注29</sup>。

## 8 国連が公認した光吉俊二「四則和算」

東大大学院道徳感情数理工学講座の光吉俊二特任准教授が発明した「四則和算」は、昨年5月に国連本部で開催された「第8回国連SDGs科学技術イノベーション(STI)フォーラム」において、持続可能な開発(SDGs)につながる核心的な科学技術であると発表され、公認された。日本独自の「四則和算」が、SDGsの中核的な科学技術につながることを国連が認めたことは、極めて注目される。

光吉は心を表す表現を辞書で調べ、日本語の心の表現は45,000語(分母は20万語)に対して、オックスフォード英語辞典には225語(分母は200万語)にすぎないことを発見し、感情地図(脳や神経伝達物質と感情の関係をマトリックスにまとめ、その上にベクトルが生まれ、感情のエネルギーを生成するメカニズムを実現する構造体)を作成し、道徳と共感力の関係を数式化して感情エンジンを開発し、AI「道徳ロボット」ペッパー(感情を認識する人型ロボット)に搭載する手順について研究した。

道徳を共感の広さで捉え直し、共感が広がるほど、道徳次元が高まり、「欲」を重複し、それがきれいに昇華することによって、高い次元の超自我制御までいくと考えた。フランス革命から、人類は我欲の衝突の時代となり、戦争が世界に拡大し、人類が不幸になっていることをフランス人に理解してもらうために、フランス大使館で「四則和算」の講演をしたという。

微分積分の理解が理系と文系の分水嶺になっているが、切算・動算・重算・裏算の「四則和算」を教えることによって、小学校高学年で微分積分を男女差なく理解できるようになり、この日本独自の和算教育を小学校や学習塾、灘高校で実践する先駆的取り組みが始まっている。

「四則和算」を研究する若手研究者も東大と京大で広がっており、東大在学中に5年ぶりに博士号(心理学)を取得した「四則和算」最初の教え子が空手道でも光吉氏の内弟子になり、「武道・心理学研究」へと進み、医学部在学中で「四則和算」の医学研究寄付講座を立ち上げた異色の学生ベンチャーの雄は「量子科学情報医療研究」へと進んでいる。

光吉氏はこの「四則和算」に、「繋げる」「混ぜる」「鍛える(伸び縮み)」「織る」という新しい演算を加え、循環する円から意識を切り出したり、それをまた切って繋げると新しい概念や関数を生成し、命題→解き方→答えという解法の流れに逆行し、命題を疑い、新しい解き方を作り出し、別の答えを計算する算術を発明した。

また、京都大学在学中の学生を中心に「四則和算」研究グループを作り、数学の根底を和算で刷新しようという挑戦が始まり、「四則和算」が京大の「哲理数学」として発展し、

西田幾多郎が創始した〈京都学派〉の哲学が求めてきた世界観を数理として研究する、画期的な試みが検討されているという。

京都大学が新たに設置を検討している「哲理数学」研究の目的は、四則和算は西田哲学が求める世界観を継承しているが、それに捉われることなく、哲学にも大きな影響を与えているAIにもう一つ新しい潮流を哲理をもって、AE（人工自我）として日本から世界に提案することにあるという。

「重算」「裏算」で解釈すると、善と悪は公平になり、絶対的なイデオロギーを捨て、政治を超えるシステム、絶対的な支配者を捨て、宗教を超えるモラルが生まれ、アメリカの真似ではない「和算」がモノマネAIを陳腐化させ、AIから日本が世界を数学のチカラで救うことになるという。

AIやロボットに道徳性を装着すること自体に賛否両論があるが、光吉はAIの判断基準を明らかにするための意志（欲求・動機）と超自我の数理モデルを設計し、道徳変換を行う反境界微分の変換の関数を東大では拡張リーマン圏、京大では光吉球と呼んでいる。

光吉によれば、「Well-beingの源泉も数式で表現でき、相手への好奇心こそが、対立を解消する源泉になる」という。また、価値の創造を生物学的人類の物理進化として、製薬や外科手段だけに頼らない「意識による治療」という新しい医療技術の価値創造から医療費削減と「幸せな生命活動」につながるように、医学部での先進的研究に取り組んでいる。

電気・電子を使わない新しい通信を生み出し、世界に「戦争せずに遺伝子操作せずに地球の持続可能な維持は可能である」と光吉は提言。危険水域からの人類救済の一步として、「クオンタル技術」の提案を和算は可能にした。クオンタルとは、デジタルとアナログを同時に含む次世代概念である。これが日本が世界をAIから救う数学の力であるという。

SDGsが分断されているのは、切れ目があるからであり、SDGsの17項目同士で対立が生まれるのは、四則演算の「割り算」と分数で捉えているからであり、「切算」という「四則和算（大和算）」が国連で高く評価され、「平和」の哲学が欠落しているSDGsを超えるビジョン、対立・分断を乗り越える理論の提示を、光吉は国連から要請されている。

また、11月8日に開催されたフィリップ・コトラー氏の「1億人世界のマーケティングシンポジウム」でも、マルクスの誤りを和算によって完全に論破した「Mitsuyoshiの式」が紹介された<sup>注30</sup>。

## 9 鄭雄一『道徳のメカニズム』の道徳論

光吉特任准教授の研究を支援している東京大学大学院医学系研究科教授の鄭雄一氏の著書『東大教授が挑む AIに「善悪の判断」を教える方法―「人を殺してはいけない」は“いつも正しいか”』（扶桑社新書）は極めて示唆的で興味深い。

同教授は医学と工学を融合した「医工学」が専門分野で、生体に働きかけて治療や再生を促す高機能デバイスの開発に従事し、イノベーションと道徳の関わりについても研究し、「道徳エンジン」（後述）を人工知能やロボットに搭載することを試み、『東大理系教授が考える 道徳のメカニズム』という著書（KKベストセラーズのベスト新書）もある。

鄭教授はヘーゲル、サンデル、構造主義を「社会中心の考え方」、アドラー・フランク

フルト学派、ロールズを「个人中心の考え方」と例示し、「社会中心の考え方」は「権威主義、集団主義、絶対論」などと要約でき、その特徴は「毅然としているが排他的」で、社会の多様性を担保することができないという。

一方、「个人中心の考え方」のコアは「個人の神格化」で、最大の弱点は「善悪の判断は個人個人が決める」ということ、つまり、具体的な道德の枠組みを構築し、共有できない点にある。従って、紛争が起きた時に、その善悪を決することができず、ただそれを傍観するだけになってしまう。これは即ち、「道德性の欠如」を意味する。

「个人中心の考え方」は、「自由主義、個人主義、相対論」などと要約でき、その特徴は「柔軟だが決定力不足」と言える。従ってこの考えだけでは、多様な社会に適用できる道德システムにはなり得ない。

そこで、鄭教授は、ロボットに人間と共生するための「道德エンジン」を搭載するには、この二つの限界を超える、新たな道德の枠組みを考える必要があると指摘している。

最も興味深い道德理論は、「道德のモデル化」と「道德の階層」理論である。まず前者については、『旧約聖書』にある「モーゼの十戒」の道德構造を、それぞれの社会に特有な「個別の掟」と、すべての社会にある「共通の掟」に分類している

同教授によれば、「共通の掟」と「個別の掟」を統合する人間の道德の基本原理は「仲間らしくせよ」であるという。この道德の基本原理には二重性があり、「仲間と同じように考え、行動せよ」という個別の掟と、「仲間に危害を加えてはいけない」という共通の掟とがあるが、通常はこの二つを区別せず、ごっちゃにして「仲間らしさ」を判定している。

「社会中心の考え方」は、人間の道德の「共通の掟」にもっぱら焦点を当てているため、実際には多様な「個別の掟」があることを無視・軽視している。その一方で、デカルト以降の「个人中心の考え方」は、人間の道德の「個別の掟」の側面に焦点を当てているため、すべての社会にある「共通の掟」の存在を無視・軽視している。

しかし、前述した人間の道德の基本原理から明らかなように、共通と個別の二重構造を持っており、「社会中心の考え方」も「个人中心の考え方」も、うまく拡張できれば、全体を捉えることができる可能性を持っている。

そこで同教授は、人間が相対したときに、その人間が持っている道德を「共通の掟」と「個別の掟」に識別し、「仲間に危害を加えてはならない」という「共通の掟」さえ守っていれば、「個別の掟」は同じである必要がない、と認識できる機能を搭載すれば、ロボットと人間は共生することができる、と指摘する。

次に、同教授は「道德感情の原動力は欲であり、欲の分類に従って道德も分類できるのではないか」という仮説のもとに、(1)マズローの欲求五段階説の問題点を明らかにした上で、(2)新しい欲の分類体系を明示し、(3)道德の次元を4つに分類し、道德は階層構造になっている、と問題提起している((1)(2)(3)の図については、「道德サロン」の拙稿連載144参照)。

このように欲の段階を用いて道德の次元構造を整理すると、

A：道德の次元の高さ $\equiv$ 仲間の範囲の広さ

B：仲間の範囲 $\equiv$ 共通の範囲

であることが分かる。このAとBの式を合わせると、

C：道德の次元 $\equiv$ 仲間の範囲 $\equiv$ 共通の範囲

となり、抽象的な道徳の次元を、より具体的な内容に落とし込むことができ、「道徳感情の原動力は欲である」と仮定することで、共通の範囲を基準にして、道徳をみごとに分類し、「心の寛容性・多様性測定器」の開発に取り組んでいる。

近い将来、会社や公共の場所に設置され、最終的に一家に一台が当たり前になると予想されるロボットも、有力な「仲間」として受け入れる態勢を整えることを真剣に考える時期だとして、興味深い“戦略”を披露し、次のように述べている。

＜ロボットに道徳次元4の道徳エンジンを搭載し、普段から家庭・会社・公共の場所でその振る舞いを見せることで、「ロボットの振り見て、我が振り直せ」よろしく、人間に「ロボットはなかなかいいことをするな」と思わせて、高い道徳次元に自然に導いていく戦略が有効ではないかと思っています。特に子どもは敏感かつ柔軟ですので、ロボットのすることをすぐ真似するでしょう。その子どもたちが「ロボットは、なかなかいいことをするな。お父さん、お母さんも何でロボットのようにできないの?」と言えば、大人たちも巻き込んでくれると思っています。＞<sup>31</sup>

## 10 日本型ウェルビーイングの根本は「日本的靈性」

前述した西田幾多郎の「絶対矛盾的自己同一」の論理と鈴木大拙の「即非の論理」の思想は照応しており、鈴木大拙は「即非」を「無分別の分別」とも言い、これこそが悟りの論理であり、「般若即非の論理」であると説いている。

鈴木大拙は昭和19年に『日本的靈性』を刊行し、日本人に共通の宗教意識が形成され、それは鎌倉時代になって、法然一親鸞の宗教において自覚的になったと指摘している。深い宗教意識を靈性と表現したことが注目されるが、その日本的靈性の知的展開が禅、情的展開が法然一親鸞の浄土教であり、そのどちらにも、日本独自のものがある。

浄土三部経（『無量寿経』、『観無量寿経』、『阿弥陀経』）は、インド（もしくは西域）で生まれたが、法然は専修念仏の仏道を確立し、法然の弟子となった親鸞は、それこそ浄土の真宗であるとして、その核心を訴えた。

鈴木大拙は、その法然一親鸞の浄土教に至って、インドにも中国にもなかった救いの道が開かれ、日本で初めて自覚化されたものであるから、その宗教意識を「日本的靈性」と呼ばざるを得ない、と指摘している。

中国の仏教は、念仏したら救われるという因果関係を超えることができなかつたし、インドの仏教は救われたらそれでおしまい、涅槃に入ったらそれでいいという傾向があったが、法然一親鸞においては、苦しんでいるその苦しみから逃れるとは言わない、この身このままで、あくまでも絶対者としての阿弥陀仏の側から包まれ、救われると説いた。煩惱を断たずして、しかも涅槃を得るという境地が開かれるというのである。

すべては阿弥陀如来がはからって下さるという気づきである。このような救いの自覚が「日本的靈性」に他ならない。それはインドにも中国にもないがゆえに、日本独自のものだと大拙は主張するのである。この救いの自覚が、ある特定の宗教者に自覚されただけでなく、さらに多くの一般大衆の信仰として浸透しているという点に注目する必要がある。それが「日本的靈性」と言われる所以である。このことを、大拙は次のように解説し

ている。

西田幾多郎の「矛盾的自己同一」とは、矛盾とか対立とかをなくすことによって同一になるのではなく、むしろ逆に矛盾を徹底的に尖鋭ならしめて、否定をバネにして、非連続的に連続することを意味する。

私たちは、存在をそのあるがままの相において把握しようとする「存在の論理」に徹するならば、必然的に自己の主體的な深まりの論理である「自覚の論理」へと進み、「見」というすべての仏教の教説に共通している根本体験に行き着く。それは「即非の論理」を単に“A=非A”としてではなく、“見(A=非A)”として見るということである。ここに「自覚の論理」としての「即非の論理」の意味があると言える。<sup>注32</sup>

現代の危機や対立・分断の根源にある論理は、自同律(AはAであるという)と矛盾律(AはAであるから、非Aではないという)を原理とする悟性のみに従って行動してきた近代合理主義である。これに対して、Aが存在するのは非Aが存在するからで、非Aが存在するのはAが存在するからである、というように相互依存関係において捉える原理を相互律という。

部分と全体、生と死、善と悪、有と無などの単純な二分法論理に立脚した対立図式で捉えるのではなく、般若系の仏教思想や西田哲学の「即非的自己同一」というホリスティックな共存関係として捉える必要がある。

西田幾多郎の「絶対矛盾の自己同一」、鈴木大拙の「即非の論理」、『中庸』の「天地の化育に賛ずる」、『モラロジー概説』において「天功を助く」と説いた廣池千九郎の道徳科学にも共通するものがあると言える。Aと非Aという絶対に矛盾するものの自己同一を示すのに、「即」という言葉、文字を用いた西田の直観的感性には驚嘆せずにはおれない。

対立・分断が深刻化している今日、自同律、矛盾律で他を排除し、他と対立するのではなく、いかにAと非Aが調和共存していくかこそが求められている。Aが非Aを敵視するのではなく、Aが非Aによって存在し、非AはAによって存在するという根源的な関係に深く「気づく」ことが大切なのである。

危機に瀕した人類の未来は、私たちがこの真実の関係にどれだけ気づくかにかかっていると一言しても決して過言ではない。現代人(子供も大人も)に幸福観(ウェルビーイング)や生き甲斐が枯渇しているのは、この真実の関係性の精神的絆を見失っているからに他ならない。

## 11 ウェルビーイングと感性工学

ポジティブ心理学を広げたセリグマンは、ウェルビーイングの要素として、ポジティブ感情、没頭、関係性、意義、達成の5因子を挙げたが、拙稿で取り上げてきた東大大学院の「道徳感情数理工学」などの感性工学的視点からのウェルビーイングの決定因子の研究によれば、(1)自己、(2)社会的、(3)超越的に3分類される。

(1)の因子には、ポジティブ感情、動機付け&没頭、自己への気づき、マインドフルネス、心理的抵抗力・回復力、(2)の因子には、感謝と共感、(3)の因子には思いやりと利他行動が含まれている。この自己、社会的、超越的に3分類されたウェルビーイングの向上を目指す感性工学技術に関する研究は多数ある。<sup>注33</sup>

萩野晃大「ポジティブ・コンピューティングとは—ウェルビーイング支援のための感性工学」（『感性工学』18(2)、2020、55–62頁）によれば、ウェルビーイングのための感性工学の技術として、(1)個人が自分の状態を知る支援と、(2)行動モデルや行動理論を利用して個人の行動の変革を促す支援が必要である。

「自己」のための感性工学技術の具体例として、石原真紀夫らは、自分の行う善行をほめられることで承認欲求が満たされ、他者貢献感とともに充実した幸福感が得られるのではないかと考え、携帯端末を用いた「感謝の可視化システム」を開発した。<sup>注34</sup>

これは、善い行いをしている人の地点を地図上で指定し、その地点に送信された感謝を受け取ることができるというアプリである。実験の結果、感謝を受信することで、嬉しい気持ちになったことが示されている。

また、中村らは「不快」「少し不快」「普通」「少し快」「快」の印象を与える視聴覚素材（スライドショーと音を組み合わせたもの）を提示することで、ネガティブ感情からポジティブ感情への誘導を試みている。<sup>注35</sup>

さらに館岡らは、利用者が入力したネガティブな文章を、ユーモラスな表現を含んだポジティブな表現に変換して出力するWebアプリケーションである「Coco-WA」を開発している。<sup>注36</sup>

他者や集団を対象とした「社会」のための感性工学技術の実例としては、渡邊淳司らは、自分への気づきや新しい関係性への働きかけをテーマとした「心臓ピクニック」というワークショップを行っている。<sup>注37</sup>他者と心臓ボックスを交換し、互いの鼓動の違いを感じ取ることで、他者との非言語的なつながりを生み出し、共創的な場を生み出している。

彼らは私一人のウェルビーイングではなく、複数の人全員がウェルビーイングな状態になる「私たちのウェルビーイング」が必要であるとしている。これは、個人の衝突を調停する人の心を起点とした新しい価値観であり、ウェルビーイングを共創するものである。<sup>注38</sup>

池松らは、グループ旅行の旅行者の心拍のピークを測定し、心拍から旅行者の興奮度を探り、グループメンバーが観光を楽しんでいない時にグループの気分を変えるような観光地の情報を提供する試みを行っている。<sup>注39</sup>

さらに、中田らは、視聴覚素材同時提示による感動喚起に関する基礎的な検討を行っている。<sup>注40</sup>ここでは、「感謝・愛情」「心に沁みる」「崇高さ」「歓喜・興奮」という4種類の感動の喚起を試みており、「崇高さ」を喚起させた視聴覚素材は、宇宙に浮かぶ地球の写真のスライドショーに平原綾香のジュピターの冒頭を組み合わせたもので、8種類の視聴覚素材の中で最も感動した素材であった。感動は没頭状態の一つと考えられるが、感性工学技術により「超越的」に対するウェルビーイングの向上が可能であることが判明した。

## 12 ウェルビーイングカードを使った道德の授業

NTTコミュニケーション科学基礎研究所では、自身や周囲の人々のウェルビーイングの要因に意識を向け、それを可視化・共有するためのツールとして、「わたしたちのウェルビーイングカード」の研究に取り組んでいる。

このカードには、ウェルビーイングの要因となるキーワードが1つずつ記載され、それ

らは、次のような「I(わたし)」「WE(わたしたち)」「SOCIETY(みんな)」「UNIVERSE(あらゆるもの)」の4つのカテゴリーに分類されている。

I 熱中、挑戦、達成、成長、自分で決める、希望、自分らしさ、心の平穩、日常

WE 友情、価値観の理解、愛、憧れ・尊敬、応援・推し、認め合う、信頼、感謝、祝福

SOCIETY 思いやり、協調、多様性、決まりを守る、社会貢献

UNIVERSE 生命・自然、縁、平和

自身のウェルビーイングの要因について、いきなり聞かれても言葉にするのは難しいが、これらの中から自分にとって大切なことを選択することが自己開示のきっかけとなり、そこから自己理解や他者理解が促進される。

また、この4つの要因のカテゴリーは、道徳の学習指導要領における4つの内容項目、すなわち、A：主として自分自身に関すること、B：主として人との関わりに関すること、C：主として集団や社会との関わりに関すること、D：主として生命や自然、崇高なものとの関わりに関すること、とも重なっている。

もともとこのカードは、ウェルビーイングの要因を介したコミュニケーションツールとしてつくられ、そのカテゴリーも主に心理学の観点から分類されたものであるが、道徳教育における内容項目の分類とも親和性がある。そこで、このカードを道徳の授業で使用する試みが始まったのである。

具体的には、NTTの同研究所と東京都市大学坂倉杏介研究室との共同研究の中で、昨年9月・10月に、カードを使った道徳実践を世田谷区立尾山台中学校の3年生を対象に行った。

まず授業の冒頭において、生徒たちがカードに慣れるために、「今、自分が大事に思っていること」をカード一覧から一枚選び、それを選んだ理由とともに3～5の班で共有した。表示されたカード一覧から一枚を選択すると、そのカードを拡大したり、自由に配置したりできる仕組みとなっていた。

教材は『手品師』（江橋照雄著）を使用し、まず先生が内容を読み聞かせ、生徒に「この時に主人公である手品師はどんな気持ちだったか？」などの手品師の気持ちに関する2つの発問をし、その答えを踏まえた上で、「あなたが手品師の立場だったら、どんな行動をとったか？」と問いかけた。

生徒は、自分が取る行動と、その時大事にしたい要因をカードから2枚選び、理由と共にタブレットに入力して提出した。それから、行動と選んだカード、その理由を共有し、議論・発表を行った。<sup>注41</sup>

この道徳の授業について、渡邊淳司氏は次のように述べている。

＜今回の実践では、道徳の授業で「わたしたちのウェルビーイングカード」を利用することが、生徒が自分や他者のウェルビーイングについて考えるきっかけとなり、さらには、主人公の立場に立って考える際の一つの手がかりになったと考えられる。実際、生徒からの感想には、「班の中でも意見が分かれた。色々な人の考え方を尊重していけたらいいなと思いました」という意見もあった。このような道徳教育での実践が、学校内の授業時間以外の取り組みや、生徒たちが家族やコミュニティのなかで“わたしたち”のウェルビー

イングを実現していくきっかけになればと思う>注42

### 13 今後の研究課題一分断・対立を乗り越えるために一

桐村理紗氏<sup>注43</sup>は、東大の「道徳感情数理工学」という感性や共感を数理モデル化する研究室を主宰し、光吉俊二准教授らと共同研究を進めている。人の意識を数理工学化する関連で、「人工自我 (AE)」も扱っている。

ITは人間の記憶力を補ったり、AIではパターンマッチ的な事務仕事、「土業」的なことを代わりに片づけたりしてくれたりして、人間のクリエイティブではない部分を補うためのツールとして使うにはすごく便利である。

しかし、生命と非生命が溶け合うように、生きとし生けるものだけでなく、ロボットとも共生するような社会が来る時にどういう技術が必要かという、感性とか意欲を生成できる技術=感性制御技術 (ST: sensibility technology) である。

AIにもボディを持たせたら、共感や感性が生まれるかもしれないと考え、こうしたAIを人工自我、Artificial Egoと呼んで開発しており、知能中心のAIとは異なる感性制御技術について共同研究が行われている。

人工知能は機械学習と呼ばれる過去のデータに基づいた学習の結果によって賢くなるアルゴリズムで駆動し、過去から学習するだけで、全く新しい発想やクリエイティブな「創発」ができない。

一方「人工自我」は、四則和算と「拡張リーマンモデル」という原理を使い、学習していない未知の事情でも対応するため、「裏」の関数  $\langle f \rangle$  として出力する。この関数が意図や意識、意欲となるベクトルや感情を創発するメカニズムとアルゴリズムを実装している。

そして、創発された感情や意図と人間との関係性から道徳心が生まれ、倫理が理解できるようになる。人工知能と人工自我の違いは、有名なトロッコ問題で説明できる。

トロッコが線路の分岐点に差し掛かり、AかBのどちらかの線路を走ると、Aの道を行くと、子供を1人轢き殺してしまうかもしれない。Bの道を行くと、高齢者を10人轢いてしまうかもしれない。

この問題を人工知能が考えると、過去にそういった特殊な状況がないので判断できない、または誤った選択をしてしまう可能性がある。この“誤ったとする根拠”も人によってばらばらである。

しかし、人間はAでもBでもない、創造的選択が瞬時にできる。これは、命題そのものを疑う機能が人には備わっているからである。こうした過去の学びがない状態でも創造的に判断できる人間の能力を工学的に開発しようというのが人工自我である。

即ち、「ヒトでは解決できない難問に対して、命題そのものから疑って解決策を創発させる」のである。

桐村氏によれば、表面的には複雑多岐で分断された世界も、実際にはすべてが相互に作用するネットワークであり、裏には共通した土台がある。多様な生物のすべてが、「生命の綱」としてネットワークを形成し、共通土台としての「土」を共有している。

物理的に分断された人と人も、インターネットにより世界中が接続しているし、距離や時間に関係なく、心はつながっている。誰が分断を作り出したのかと言えば、人の意識に



他ならない。

この世界はプラスとマイナスのように相対する2つの要素が結ばれてできている。しかし、その二つの要素は、どちらが優れていて、どちらが劣っているというものではない。どちらもが必要で、どちらにも偏りすぎず、環境の変化に応じて柔軟に対応し、バランスを取っている状態がホメオスタシス（生体恒常性）が保たれた健康的な状態と言える。

私たちが、身体の外から受ける環境や内部の変化に関わらず、身体の状態（体温・血糖・免疫）を一定に保つことをホメオスタシスと言う。ホメオスタシスを重視する思風庵哲学研究所の芳村思風所長は「発生学的解釈学」という方法を通して、「感性の世界が持つ『構造』を理性が『原理』として自覚化し、それを理性の判断基準と考えることによって、感性を原理とした世界観や人生観が成立する」と説いている。

音楽の脳科学的基盤の研究を世界的に牽引しているザトーレ（Zatorre, R, J）などは、PET（ポジトロン断層法）などの脳機能画像を用いて、音楽を聴いてゾクゾクと鳥肌が立つような快感を体験する際の脳領域を解明した。また、画家のように絵を描くことに熟練した人とそうでない人とで、脳がどのように違うかを調査した結果、プロの画家においてのみ右半球の前頭葉が強く活動していることが判明した。

さらに、専門家に新しいデザインを作り出す時の脳活動をfMRI（機能的磁気共鳴画像法）で調べたところ、右半球の前頭葉にある下前頭回の活動が高まり、一方の左半球の同じ領域の活動は抑制されていることがわかった。

感性処理の特色を知的処理と対比的に考察し、感性に関与する要因は、多量的でしかも情報量が多く、複雑な相互作用により、要素には還元できない創発特性を持っていることが明らかになった。

日本政府は第5期科学技術基本計画において、人々に豊かさをもたらす「超スマート社会（Society 5.0）」を未来社会の姿とし、サイバー空間（仮想空間）と現実空間を高度に融合させる取り組みを推進し、狩猟・農耕・工業・情報社会に続く新たな社会を目指すことを政府目標として掲げた。Society 5.0が目指す社会は、すべての人とモノがつながることができる様々な知識や情報が共有され、今までにない新たな革新を生み出すものとされている。

人工知能（AI）の出現によって必要な情報が必要な時に提供されるようになり、ロボットや自動走行車など人々の暮らしに直結する技術の進展により、少子高齢化や過疎化などで起きている様々な問題が克服され、世代を超えて互いに尊重し合える社会、一人ひとりが快適で活躍できる社会の創出につなげることができると期待されている。

こうした人間の内面と情報やモノとのつながりを理解するには、脳科学と感性科学の融合が必要不可欠と言える。東京大学の大学院工学系研究科の「道徳感情数理工学講座」では、人工自我に感情を与え、人と寄り添う共感力と道徳心を持たせるという共同研究がすすめられ、学生向けの講座が始まり、「東大生が最も受けたたい授業」と反響を呼んでいる。

道徳科の目標を構成する(1)道徳的判断力（道徳心理学では「認知」）、(2)道徳的心情（「感情」）、(3)道徳的实践意欲（同「動機付け」）、(4)道徳的態度を、道徳心理学（感情・認知・進化心理学など）や脳科学、「道徳感情数理工学」等の最新の科学的知見に基づいて理論的に整理し体系化する必要がある。とりわけ道徳的感情が共感性や道徳的判断力・実践

意欲・態度に与える影響、縦軸の道德性と横軸の多様性の関係について考察する必要がある。

これまで世界を「上下」「左右」「表裏」「生死」「男女」「身心」のように二元論で捉え、その片方だけに価値があり、片方には価値がないと切り捨てたり、支配しようとしてきた。

社会が混沌としている今、「人工自我」に感情を与え、人と人が寄り添う共感力と道德心を持たせるという研究が、東京大学大学院工学系研究科道德感情数理工学講座を率いている光吉俊二特任准教授のリーダーシップのもとで進んでいる。光吉氏は「二元論に分けて、半分を切り捨てる」という対立的な人の思考を「割り算」的と表現している。

「 $1 \div 2 = ?$ 」という問いに対して、私たちは2分の1又は「0,5」と答える。確かに「あるものを等分にして、そのうちの一つの断片を求める」という命令の割り算（これを等分除という）の場合、この答えは間違っているわけではない。

しかし、一つのリンゴを半分にカットしても、そのうちの半分の断片がマジックのように消えるという事は現実にはあり得ない。カットしたリンゴの断片は、2分の1と2分の1として両方が残り、総和は「1」という状態が保存される。「割り算」に半分を消し去ることは、人の脳内でしか起こっていないのである。

光吉特任教授はこうした諸々の割り算的矛盾を突き詰め、足し算・引き算・掛け算・割り算という既存の四則演算では表現しきれなかった、ありのままの世界を表現可能な4つの新しい演算子「切り算 (cut)・動算・重算・裏算」を生み出した（詳しくは、鄭雄一『東大教授が挑む AIに「善悪の判断」を教える方法』扶桑社新書、参照）。

この数理によって導かれる方程式は、アインシュタインやホーキング博士らが追い求めてきた、宇宙万物の理論「Theory of Everything」だと高く評価され、国連でも公認されたのである。

この数理を応用することによって、人工自我が従来の硬直的な対立的な二元論を超える調和的、包括的な意識を持ち、表の世界の「多様性」と同時に、裏にある「共通性」を理解し、道德感情（道德的な心）と共感力を持つ未来が到来すると予測されている<sup>注44</sup>。

「近代認識論の根本的誤謬」を批判する伊東俊太郎東京大学・麗澤大学名誉教授は、観念論的意識主義と唯物論的模写説の双方を批判し、実際は主観でも客観でもなく、その両者の結びつく状況全体の中にこそ、認識の「現実」があり、関数がつくっている状況全体を「認識の場」と呼び、存在論と認識論の対立を乗り越える「場所論」への転換を強調した。

和辻哲郎は『人間（じんかん）の学としての倫理学』で、人と人の対話によって発展していく「間柄」によって、共通の認識が生成されていくと捉え、「風土」の重要性を強調した。伊東は異文化との対話が重要と説く。

伊東によれば、「進化という絆」「とも生きの絆」が我々と自然とを結び付け、生き物の進化の過程で心が出現して人間が成立し、「横への超越」という「宇宙連関」へとつながるという。伊東は、生物同士、人間同士の関係の中で進化して形成されているという「進化的倫理」、進化を基盤とする「進化的哲学」を提唱し、「道德の起源」論を展開した。

西田幾多郎が「場所の哲学」「場所的世界」ということを最初に言ったが、和辻の「風土」にも共通の問題意識が見られる。西田の場所の定義は「述語となって主語とならないもの」であるが、主語中心の哲学から、述語中心の哲学へ転換したのが西田幾多郎である。

西田は「仏教において観ずるということは、対象的に神仏を観ることではなく、自己の根源を照らすこと、顧みることである。それは世界成立の根源に入ることにほかならない。…それは道徳の根底となる立場である」と、「場所的論理と宗教的世界観」という論文で指摘している。

「存在」とか「認識」といった静的なものを最初に指定するのではなく、生成し発展し進化していくダイナミックな創成を追求する新しい知の在り方が、これからの哲学に求められている。進化に基づく動的な知を求める基盤、土台をつくるのが「場所論（コーコロジー）」であると伊東は結論づけている<sup>(注45)</sup>。

伊東は西田のナショナリズムを乗り越える「地球性」「地球倫理」の重要性を説いたが<sup>(注46)</sup>、光吉俊二氏の「四則和算」の数理を分かりやすく解説するためには、従来の「存在」と「認識」の二元論的対立を打破する「場所論」の視点が必要不可欠である。京都大学に新設される「哲学数学」は、西田哲学の場所論と伊東俊太郎の「コーコロジー（場所論）」との関係を探究することが求められる。

廣井良典によれば、分離していた経済と道徳が再融合する兆しが見られ、拡大・成長ではなく、持続可能性・循環・相互扶助に軸足を置いた成熟した経営や経済へと移行しつつある。西田哲学の根本概念である「存在」に代えて「変容」を、しかも「共に変容」することを重視し、「変容する人間に価値」を置くHuman Co-becomingという「人の資本主義」の新たなコンセプトが、立命館大学稲盛経営哲学研究センターの同研究プロジェクトの共同研究の成果として提唱され、中島隆博編『人の資本主義』として東大出版会から刊行された<sup>(注46)</sup>。これは西田哲学の存在論への挑戦といえよう。

光吉氏が「ウェルビーイングの数式が完成した」として送ってこられた「人類史と四則和算」と題する約300頁に及ぶパワポ資料において、「意識の信号処理」として、「哲学数学では、『意識』『行為』『分離数』『連続量』をちゃんと分けて扱うことで、意識を数理で扱えるようにしようとする試みである」と明記しており、この「哲学数学」の研究がどのように進展するかが注目される。

また、廣池千九郎博士は『新版 道徳科学の論文』第9冊<sup>(注47)</sup>において、東宮御学問所で7年間、昭和天皇に「倫理」について講義した杉浦重剛の「理学宗」が、「物理学の法則を人間行為の法則に応用して、道徳を説明」しようとした点に注目されているが、杉浦が提唱した「理学宗」とは、近代物理学の定則である「勢力保存論」と「波動説」とを原理とし、自然現象から人間の歴史や存在の規範まで及ぶ普遍的法則で捉える宇宙論的性格を持つ構想であり、「道徳ノ大本」もまた理学の理論によって基礎づけられるべきであると主張した。杉浦は、西洋の近代的自然科学の知見と矛盾せず、かつまた東洋の人間学の叡智から乖離することがない独自の原理を求め、易の理論に注目した。

皇紀夫京都女子大学教授は、「この理学宗という宇宙論的な人間形成の理論の着想が、東西文明の統合（伝統と近代、道徳と科学との調和的な展開）という日本の近代化の課題に対するひとつの試みであったと理解することができる」と述べているが、「内面的道徳的人間の形成」「至誠一貫の精神的強靱さを育てる教育」「精神の力」を育てる教育と総括できる<sup>(注48)</sup>。

本論文で取り上げてきた東大大学院の光吉「四則和算」、鄭雄一「道徳のメカニズム」、西田幾多郎哲学、出口康夫の「AI親友論」、伊東俊太郎の「場所論」、廣井良典の「地球倫理」

などを杉浦の「理学宗 (Scientific Morality)」の視点から見直し、廣池千九郎が「精神革命と科学革命の融合」を道徳的視点から図ったことの比較文明論的意義を明らかにする必要がある。

麗澤大学大学院の中山理特別教授によれば、廣池千九郎は、最高道徳の実践によりウェルビーイングが享受できると考えた。それを立証するためにモラロジーという学問を創設した。モラロジーとは普遍道徳と最高道徳の実質・原理・内容を比較研究し、その道徳実行の効果を科学的に証明しようとする、一つの新科学である。

幸福享受の普遍的対象は「世界人類の安心・平和・幸福 (ウェルビーイング) の現」にあり、「道経一体」の効果は、道徳によって経営における人間関係を変容させる点にある。中山によれば、廣池のウェルビーイング論を成立させる因子は、一般人のウェルビーイング感 (人生満足度、主観的幸福感) ではなく、世界の諸聖人 (賢者) の道徳的精神を基準とする哲学的アプローチである点が、ウェルビーイング追求の姿勢の相違点と言える<sup>(注49)</sup>。

モラロジー道徳教育財団道徳科学研究所の共同研究「ウェルビーイング教育研究会」において、以上のような研究課題をさらに深め、幸福学の第一人者である前野隆司慶応大学教授や京都大学大学院の廣井良典・内田由紀子・出口康夫教授、東京大学大学院の鈴木寛教授らの協力を得ながら、来年の財団創立百周年に向けて、ウェルビーイングと道徳の関係に関する科学的研究の新たな成果をまとめ、内外に発信していきたい。

また、6月末に北陸大学で開催される日本道徳教育学会 (大会テーマ「ウェルビーイングと道徳教育」) で同テーマのラウンドテーブル発表 (2時間) を行い、ウェルビーイング教育研究会の共同研究の成果と今後の研究課題について報告する予定である。

## 注

- 1 内田由紀子『これからの幸福について—文化的幸福観』新曜社、2020、123-125頁
- 2 同131-132頁
- 3 同132-135頁
- 4 同95-100頁
- 5 同67-68頁
- 6 同64-68頁
- 7 同107-110頁
- 8 同38頁
- 9 Singer, T (2006) The neuronal basis and ontogeny of empathy and mindreading: Review of literature and implications for futureresearch. *Neuroscience and Biobehavioral Reviews*, 30(6)855-863
- 10 拙稿「脳科学から道徳教育を問い直す—新たな道徳教育学の樹立を目指して(1)」『モラロジー研究』第84号、2020、126-127頁
- 11 渡邊淳司・ドミニク・チェン『ウェルビーイングのつくりかた』BNN、2023、188頁
- 12 注9と同じ
- 13 ラファエル・A・カルヴォ/ドリアン・ピーターズ『ウェルビーイングの設計論』BNN、2017、266頁
- 14 Thomas, M.R., Dyrbye, L.N., Huntington, J.L., Lawson, K.L., Novotny, P.J., Sloan, J. A., Shanafelt, T.D.(2007)How do distress and well-being relate to medical student Empathy?A multicenter study *journal of General Internal Medicine*, 22(2)、177-183

- 15 Gallagher, E.N., & Vella-Brodrick, D.A (2008) .Social support and emotional intelligence as predictors of subjective well-being. *Personality and Individual Differences*, 44(7), 1551-1561
- 16 前掲『ウェルビーイングの設計論』BNN、2017、269頁
- 17 同307頁
- 18 拙稿「今なぜSWGs・Well-beingなのか？—SDGsの起源と欠点を踏まえて」note2023、11、11
- 19 同「SDGsからSWGsへ—閣議決定された「日本発ウェルビーイング」(バランスと調和)」同11、9、同「我が国のWell-beingの最新動向」同、同「SDGsに欠落している家族・家庭の視点—Well-beingで重視すべき家族・家庭支援」同8、10
- 20 渡邊淳司・ドミニク・チェン監著、安藤英由樹、板倉杏介、村田藍子編著『わたしたちのウェルビーイングをつくりあうために—その思想、実践、技術』BNN、2020、20-22頁
- 21 Sander, T.(2011)Positive computing.In R.Biswas-Diener(Ed.)。Positive psychology as social change(pp.309-326).New York:Springer
- 22 前掲『わたしたちのウェルビーイングをつくりあうために』23頁
- 23 拙稿「ウェルビーイングとは何か」note2023、11、15
- 24 石川善樹「『日本のウェルビーイング』を理解するために」『わたしたちのウェルビーイングをつくりあうために』207-213頁
- 25 出口康夫「『われわれとしての自己』とウェルビーイング」前掲書、240-254頁
- 26 同『京大哲学講義 AI 親友論』徳間書店、2023、48・66-69・133-164頁参照
- 27 拙稿「宗像大社の葦津宮司の『常若』論文—持続社会に向けた日本人の自然観」note2023、11、20
- 28 拙稿「岸本吉生『SDGsと道徳』特別講義(1)(2)」note2023.12、16、12、17
- 29 安田登「『もたない』ことの可能性：和と能から『日本的』を考える」前掲書、214-230頁
- 30 光吉俊二「感情制御技術によるコンピューター・ロボットの仮想自我と感情創発」  
日本機械学会編『感覚・感情とロボット—人の機械のインタラクションへの挑戦』工業調査会、2008、参照。拙稿「国連が注目する『四則和算』と京都学派の哲学を継承する『哲理数学』」モラロジー道徳教育財団「道徳サロン」連載146参照
- 31 鄭によれば、道徳は海苔の缶みたいに円柱形で上からばかり見ていると丸に見え、横からばかり見ていると四角に見えるが、本当は円柱である。縦軸と横軸を重ねて包括的に見る視点が必要である。また、マズローの欲求五段階説の問題点は、「安全欲求」と「生理的欲求」、「承認欲求」と「所属と愛欲求」は動機が似ていて冗長であり、自己実現欲求は分類が少なすぎ、自己犠牲的な聖人と純粋な動機の自爆テロ犯はどちらも自己実現しているの、一緒に分類することはできない点にあるという。鄭雄一『東大教授が挑む AIに「善悪の判断」を教える方法—「人を殺してはいけない」は「いつも正しいか？」扶桑社新書、2018、参照。アルボムッレ・スマナサーラ著『道徳ロボット—AI時代に欠かせない「幸せに生きる脳」の育て方』サンガ、2019。拙稿「東大大学院理系教授の画期的な道徳論(1)~(4)」note10、21-24 参照
- 32 竹村牧男『鈴木大拙 願行に生きる—その生涯と西田幾多郎との交遊(下)』NHK出版、2023、10-13、48-63頁
- 33 宝珍輝尚・萩野晃大・福本誠・木下雄一郎「ウェルビーイングと感性工学」『感性工学』Vol.21 No.5、2023、197-202頁
- 34 石原真紀夫、長野美月：感謝の可視化に関する検討、第15回日本感性工学会春季大会予稿集、4C-03、2020。
- 35 Nakamura, S., and Hochin, T. Positive computing using pictures and sound clips, *Proceedings of Computer Information Systems, Biometrics and Kansai Engineering 2023*, pp.171-185., 2023.
- 36 館岡大貴、市村祐樹、山下部駿、原口僚平、星野貴仁、須永直人：ネガティブな感情を緩和させるユーモアを活用したポジティブ・コンピューティング・アプリケーション「CoCo-WA」の提案、第15回日本感性工学会春季大会予稿集、5C-01、2020
- 37 渡邊淳司、村田藍子：ポジティブ・コンピューティングを自分事とするために—ウェルビーイングへの身体性からのアプローチ、『感性工学』18(2)、63-67頁
- 38 渡邊淳司・ドミニク・チェン監著、安藤英由樹、板倉杏介、村田藍子編著『わたしたちのウェルビーイングをつくりあうために』BNN、2023
- 39 Ikematsu, Y., and Ogino, A.:Information system for estimating people's mood at Sightseeing using their pulses information, *Proceedings of the 5th International Conference on Computational*

- Science/Intelligence and Applied Informatics (CSH 2018)、pp.156-159, 2018
- 40 中田裕亮、宝珍輝尚、野宮浩揮：視聴覚素材同時提示による感動喚起、第6回日本感性工学会春季大会、22C-03、2011
  - 41 渡邊淳司・ドミニク・チェン『ウェルビーイングのつくりかた』第3章、2023、196-199頁
  - 42 同199頁
  - 43 人と地球全体の健康を実現する「プラネタリーヘルスケア」について発信し、フジテレビ「ホンマでっか!? TV」にメディア出演多数。著書に『腸と森の「土」を育てる』など。
  - 44 米スパコン大会で「四則和算」を使った東大の量子技術の特許による人工神経開発の成功を、NECが2020年に発表した。光吉によれば、相手への好奇心こそが、対立を解消する源泉になり、ウクライナとロシア、イスラエルとハマスの対立という危険水域からの人類救済の第一歩として、デジタル（“好き”か“嫌い”か）とアナログ（“好き”の度合い）を同時に含む「クオンタル技術」を提案することによって日本が世界を救うことができるという。
  - 45 伊東俊太郎『『コーロロジー（場所論）』再考』『モラロジー研究』86号、2021、1-17頁。同『伊東俊太郎著作集』第5巻、麗澤大学出版会、2010、175-182頁。同『人類史の精神革命』中央公論新社、2022。同・廣井良典対談「シゼニズムの提唱」佐伯啓思監修『ひらく』第2号
  - 46 中島隆博編『人の資本主義』東大出版会、2021
  - 47 廣池千九郎『新版 道徳科学の論文』第9冊第15章第2項第4節「杉浦重剛先生の理学宗」廣池学園出版部、1986、72-74頁。所功「解説 杉浦重剛と『教育勅語』の御進講」『教育勅語 昭和天皇の教科書』勉誠出版、2002
  - 48 皇紀夫「杉浦重剛について」『教育哲学研究』巻54号、87-90頁
  - 49 中山理「廣池千九郎とウェルビーイング—モラロジーの視点から」ウェルビーイング教育研究会発表資料、2024、1、19